

第十三章 文及び其の成分

文又は文章

前の章までで、單語に關するお話を終へましたから、これから文に關するお話を致します。

單語が結合致しまして、一つの完全な思想を表すものを文^{ぶん}又は文章^{ぶんしょう}と云ひます。例へば「雨」は名詞、「降る」は動詞、「が」は助詞で、何れも單語でありますが、それが結合して「雨降る」。又は「雨が降る」。となりますと、一つの思想を表す、即ち文又は文章なのであります。

却説單語が結合すると云ふ意義に就いては、一言説明を加へて置かなければなりません。其の意義は「雨降る」の如く言が結合し、又は「雨は降りぬ」風が吹き出した。の如く言^{（「雨降る」「風」）}と辭^{（「は」「た」）}とが結合すると云ふことであります。辭だけではそれが幾つ結合しても、何等の觀念も表すことが出來ず、隨つて思想を表すことが出來ないのであります。處で言又は言と辭とが結合すれば完全な思想を表すか、即ち文であるかと申しまするに、必ずしもさうとは限らないのであります。例へば「降る雨」「降りぬる雨」「吹き出

した風がの如きものは、文法上から申しまして、論理上から申しまして、聊か非難すべき點のない單語の結合でありますけれども、單に「降る」と云ひ、「雨」と云ひ、「降りぬる」と云ひ、「雨は」と云ひ、又は「吹き出した」と云ひ、「風が」と云つたよりは複雑な觀念を表すばかりで、「降る雨が何うしたのか」「降る雨に何うなつたのか」、又は「降りぬる雨は何うなのか」「吹き出した風が何うなのか」、更に明かでない、即ち完全な思想を表す文とは云へないのであります。然るに「雨降る。又は「雨は降りぬ。風が吹き出した。の如きものは、雨が何うしたか、降るの何か、または「雨は何うしたか、降りぬる何か、風が何うしたか、吹き出したのは何か等と問ふ餘地がない、單語が結合して而も完全な思想を表して居る、即ち文であるのでありまして、單語が結合すると云ふことと、一つの完全な思想を表すと云ふこととは文又は文章の成立に缺くべからざる要件なのであります。

主要成分

文または文章には必ず敘述の主題になる物事を示すもの即ち主語と、其の主題に就いて敘述するもの即ち述語とが要る。例へば「雨降る」「雨は降りぬ」と云ふ文に於て、敘述の主題になる「雨」と「雨」に就いて敘述する「降る」又は「降

補充成分

りぬ」とが思想の構成に缺くべからざるが如く、風が吹き出した」と云ふ文に於て、敘述の主題になる「風」と「風」に就いて敘述する「吹き出した」とが思想の構成に缺くべからざるが如き類であります。主語と述語とを總稱して文の主要成分と云ひます。

主語・述語は文の構成に缺くべからざる成分ではありますが、此の二つがあれば毎に文を構成するかと申しまするに、必ずしもさうではありません。述語の性質に依りましては、尙他の成分を要するのであります。文の述語になるべきものの資格に就きましては、第十四章に詳しくお話しする積りてありますが、用言即ち動詞・形容詞・形容動詞が其の役目に當ることが最も多いのであります。

(客語)

先づ動詞に就いて究めて見まするに、既に第六章第四節に於てお話し致しました如く、他動詞は敘述の役目を完うせんが爲に、其の作用を受けるもの、即ち客語を要します。例へば「兒童、犬を打つ」又は「小娘が花を賣る」と云ふ文の述語になつて居る「打つ」又は「賣る」は、夫自身では「兒童」又は「小娘」に就いての敘述の役目を完うする事が出来ないて、其の作用を受ける「犬」又は「花」と云

(能動の補語)

ふ客語を要します。又不完全自他動詞は敘述の役目を完うせんが爲に、其の作用の係るもの即ち補語を要します。例へば「牧童牛に跨る」又は「顔が猿に似る」と云ふ文の述語になつて居る「跨る」又は「似る」は夫自身では「牧童」又は「顔」に對する敘述を全うすることが出來ないで、其の作用の係る「牛」又は「猿」と云ふ補語を要し、「農夫麥を車に載す」又は「姉が繪本を妹に見せる」と云ふ文の述語になつて居る「載す」又は「見せる」は夫自身では「農夫」又は「姉」に對する敘述を全うすることが出來ないで「麥」又は「繪本」と云ふ客語の外に「車」又は「妹」と云ふ補語を要します。

(所動の補語)

それから次に所動の動詞に就いて考へて見まするに、所動の動詞は不完全自他動詞は勿論、完全自他動詞でも其の主語に對する敘述を完うせんが爲に必ず其の補語を要します。例へば「われ雨に降らる」又は「母が子供に泣かれる」と云ふ文の述語「降らる」又は「泣かれる」は所動の完全自動詞でありますが、其の主語たる「われ」又は「母」に對する敘述を完うせんがために「雨」又は「子供」と云ふ補語を要し、「甲乙に超えらる」馬が人に乗られる」と云ふ文の述語「超えらる」乗られる」は所動の不完全自動詞でありますが其の主語たる「甲」馬に

(令動の補語)

對する敘述を完うせんが爲に「乙」又は「人」と云ふ補語を要し、「賊警吏」に捕へらる。又は「蛙」が蛇に吞まれる。「の」捕へらる。又は「吞まれる」は所動の完全他動詞でありますが、其の主語たる「賊」又は「蛙」に對する敘述を完うせんが爲に「警吏」又は「蛇」と云ふ補語を要し、「生徒教師」に數學を教へらる。「娘が母」に着物を着せられる。「の」教へらる。着せられるは所動の不完全他動詞でありますが、其の主語たる「生徒娘」に對する敘述を完うせんが爲に「教師」「母」と云ふ補語を要する類であります。

又令動の動詞に就いて考へて見まするに、これも其の主語に對する敘述を完うせんが爲に、必ず其の補語を要します。例へば「有志者總代」をして上京せしむ。「騎兵が馬」を走らせる。(令動の完全自)「父子」をして實業に就かしむ。「下女が鶏」を鳥舎トリヤにはいらせる。(令動の不完全自)「賴朝義經」をして義仲を攻めしむ。「教師が生徒」に樹を植ゑさせる。(令動の完全他)「甲乙」をして事情を丙に告げしむ。「祖父が父」に家を子に譲らせる。(令動の不完全他)の如き類であります。所動の不完全自他動詞は能動の補語の外に更に其の補語を要するのであります。

(形容詞及び
形容動詞の補
語)

夫から最後には形容詞及び形容動詞に就いて究めて見ます。形容詞及び形容動詞は少數の語を除きましては夫自身で主語に對する敘述を全う致します。例へば「等し」「同じ」等は「甲は乙に等し」「それはこれと同じ」の如く、毎に補語を要しますけれども、他の形容詞及び形容動詞は「山は高し」「收穫が多い」「月影明かなり」「こゝは暖かだ」の如く、夫自身で主語に對する敘述を完う致します。併しながら若しそれが比較する場合に用ゐられました時には常に其の比較の對象たるべき補語を要することになります。例へば「父母の恩は山より高し」「收穫が去年より多い」「太白月よりも明かなり」「あすこはこより暖かだ」の如きはそれであります。又比較する場合に用ゐられなくても、少し其の意味を變じて用ゐられれば、補語を要するものもあります。例へば「道に疎し」「地理に暗し」「資力に乏しい」「猿に近い」などはそれであります。形容詞の補語と云ふ事は從來の學者の全く度外視した所で、殆んど其の存在を認めなかつたやうでありますが、場合に依つては之を要することもあると云ふことは吾々の注意を要する所であります。

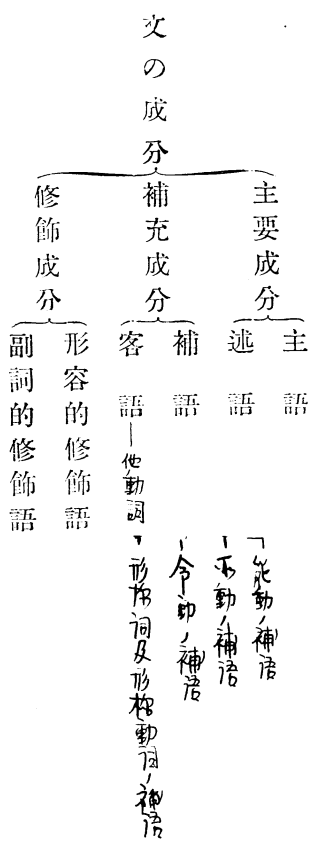
以上述べた所を概括致しますれば、主語と述語とは文の構成に必須な成

分であるが、此の二つだけでは不十分な場合がある。述語の性質に依つては尙客語を要することもあり、補語を要することもあり、又補語客語の何れもを要することがあると云ふことになります。補語・客語を總稱致しまして文の補充成分と云ひます。

却説文の構成に必ず主要成分を要し、場合に依つては補充成分を要することは右の通てありますが、文が主要成分又はそれと補充成分とで構成されたのは最も簡単な思想を發表するものでありまして、少しく複雑な思想を發表致しまするには、成分の一つ又は二つ以上が他の單語又は單語の集合したものに依つて修飾されるのが普通であります。例へば「美しい花咲く。」「綺麗な鳥が鳴く。」「の如きは主語が修飾され、空よく晴れたり。」「人が皆逃げた。」「の如きは述語が修飾され、人々散る花を惜しむ。」「又は、大將は遅しい馬に乗つて居る。」「の如きは、客語又は補語が修飾され、滔々たる雄辯は竝み居る人々に深き感動を與へたり。」「又は、烈しい風が高い木を横様に倒した。」「の如きは主語・補語・客語又は主語・客語・述語の三つが修飾されて居ります。此の中で「美しい・綺麗な・散る・遅しい・滔々たる・竝み居る・深き・烈しい・高い」の如く、或成分を

形容して修飾するもの、を形容的修飾語と云ひ、よく「皆」横様に如く、或成分を限定して修飾するもの、を副詞的修飾語と云ひ、總稱して修飾成分と云ひます。

之まで申した所は文の成分の主要なものを擧げたのでありますが、之を總括して表に示しますと、かうなります。



以上述べた文の成分は其の雛形を示すために唯一つの觀念を表すものを出して置きました。唯一つの觀念を示すものと云ふのは、一つの言又はそれとそれに隸屬した辭とをこめたものを申すのでありまして、辭は品詞論では別箇に之を取扱ひますけれども元來言に依立すべきものでずから、

言
辭
文成令ノ部
語一文人令
分ナリ
スルモ

文章論では之に獨立の位置を與へないで、文の成分に、隸屬したもの、と見るのであります。言を換へて云へば文の成分の一部分を爲すものと見るのであります。即ち以上述べました文の成分は言又は言に辭の隸屬したものを出すに止めたのでありまして、かゝるものを語と申します。之から雷に語ばかりでなく、連語や節が各成分をなす場合にも説き及さうと思ひます。